

家庭教育支援のあり方について議論する上での課題等

事例発表等による情報収集を踏まえた第3回までの議論によって、これからの家庭教育支援のあり方について、現在はどうな課題があるのかという委員の意見を大別した。

(1) 支援が十分に届いていないという課題

支援の手へとつながりにくい、つながることができない家庭がある

- ・困っている家庭、つながれない家庭を、どうつないでいくか。
- ・子育て中の保護者にとって、話を聞き、必要な時に情報を提供し、必要な人や機関につないでくれる人が身近にいない。
- ・講座や体験活動等の取組を行っても、参加しないままの人がいる。
- ・保護者は、困ったときに、最初の救いの手を誰に求めればよいのか分からない状況にある。
- ・子どものことで困り感を持っている保護者は、学校に対してなかなか本音を言えないことが多い。
- ・ひとり親家庭、外国籍の家庭など、家族が多様化している。
- ・障がいのある保護者や、障がいのある子どもにも光をあてていくべき
- ・共働きが増え、子どもと接する時間や学校などの機関と関わる時間もない保護者が多い中で、そういう人たちを地域とどのようにつなげていくか。
- ・誰もが、ちょっとしたことで孤立化してしまう社会状況であり、経済的な貧困だけでなく関係性の貧困が広がっている。

必要な情報が、必要な時に必要な人に適切かつ十分に伝わっていない

- ・情報が、事実でないことも含めて、保護者同士の SNS でのやり取りで一人歩きして伝わっていく傾向がある。
- ・よい取組が行われていても、PR が効果的に行われず、きちんと伝わっていない。
- ・必要な家庭に必要な情報をどのように伝えていくかが課題。特に、父子家庭に対してどのように情報を伝えるか。

(2) 支援体制を作る上での課題

既存の仕組みや取組が十分に機能していない

- ・スクールソーシャルワーカーの活動が、学校現場を含めて十分に認知されていない。
- ・地域で活動する民生委員の人数は十分ではなく、民生委員のみでその役割を果たすことは困難。
- ・様々な役割が細分化され、それをどうコーディネートするか考えなければいけなくなっている。(細分化することで生じている課題)

地域は、様々な社会的課題への対応の担い手として期待されており、負担感が大きくなっている

- ・様々な社会的課題に対し、ばらばらに施策が打たれ、それを実際に引き受けるのは同じ地域の方という状況があり、地域はいっぱいいっぱいになってしまう。